

小木地区の概要

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-09-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00064069

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



1. 小木地区の概要

西本 陽一

1. はじめに
2. 小木地区の概要
3. おわりに

1. はじめに

金沢大学人間社会学域文化人類学研究室は、2019年度の学部3年生および大学院博士前期課程生を対象とする調査実習を、石川県鳳珠郡能登町小木地区にて実施した。本報告書は参加したメンバーが執筆した報告によって構成されており、本研究室の調査実習報告書としては35冊目となる。調査実習の目的は、学生が社会調査実習のやり方を学ぶとともに地域の生活に対する理解を深めることで、地域の問題解決や発展への提言にはおよんでいない。調査実習の参加者と調査日程については、巻末の「おわりに」に記したとおりであるが、8月お盆過ぎからの7日間の滞在調査（「本調査」と呼ぶ）が中心活動である。この本調査の準備として、4月から7月までは金沢での調査方法の指導、文献・統計資料の収集と分析などのほか、予備調査を並行して実施した。本調査終了後の10月から翌年2月までは、補充調査をおこないながら、授業の中で、報告書作成のための意見交換や中間報告をおこなってきた。

調査対象地域については、はじめて実地調査をおこなう学生にとって取り組みやすい大きさであること、漁業を中心とした特色ある集落であること、イカというシンボルのもとで地域活性化が盛んなことなどが挙げられるが、それ以上に深い理由はない。能登町役場からの紹介もあり、幸いに地元の方々からも積極的な協力が得られる見通しが立ったこともあり、調査実習実施に到った。

例年どおり、本報告書の2章以下の各論では、それぞれの執筆者が特に関心をもったテーマにもとづいて執筆しているの、それらが全体として小木地区についての網羅的・体系的な報告となっているわけではない。そのため本章では、小木地区の立地、行政上の位置づけ、生業と生活一般について短い記述をおこなった上で、同地区の特徴について若干の指摘をおこない、2章以下の各論への導入としたい。

2. 小木地区の概要

2.1 実習対象地区

本年度文化人類学調査実習では、能登町小木地区の23集落のうち、海側の16集落を選んで対象地域とした。ここで言う「小木地区」は国勢調査の区分で、23集落（表1の

集落 1～23) からなるが、予備調査の際に地元の方々に相談したところ、小木地区のうち、「字小木」と呼ばれる、古くから住人の住んでいる 16 集落を調査実習の対象地とすることになった。字小木は、西町第一、西町第二、東町第一、東町第三、森町、下浜第一、下浜第二、下浜第三、下浜第四、高浜第一、高浜第二、三矢第一、三矢第二、庄崎第一、庄崎第二、庄崎第三の 16 集落から構成され、人口・世帯数ともに小木地区の約 7 割を占める(表 1 の集落 1～16)！。

小木地区の字小木、市之瀬、越坂、明野、高瀬はそれぞれ地区の性格を異にする。海に近い字小木は、はじめ漁業によって発達した集落である。漁業中心だった字小木は、「米は作らないが魚と交換するので、農家よりも米を食べることができた・・・漁師は重労働

なので一般に『白い飯』を食べることになっていた」という²。字小木のうち「東町」と「西町」は合わせて「本町」と呼ばれ、古くからの集落である。

市之瀬と越坂は九十九湾に面し、かつては半農半漁によって発達した。明野は戦後の開拓集落で、昭和 59 (1984) 年ごろには、タバコ栽培や養鶏などの専業農家があった³。高瀬は、昭和 49 (1974) 年に着工、53 (1978) 年に完成した整備事業によって開発された地域である。宅地不足解消するために高瀬山ニュータウンが作られ⁴、漁師になって

表1 小木地区の人口と世帯数

小木地区		人口	男	女	世帯数
1	西町第一	117	59	58	51
2	西町第二	93	42	51	33
3	東町第一	102	51	51	39
4	東町第三	168	118	50	105
5	新町	104	48	56	39
6	下浜第一	93	45	48	26
7	下浜第二	76	40	36	32
8	下浜第三	143	69	74	62
9	下浜第四	108	59	49	50
10	高浜第一	81	36	45	34
11	高浜第二	56	27	29	26
12	三矢第一	54	23	31	19
13	三矢第二	75	39	36	30
14	庄崎第一	152	93	59	81
15	庄崎第二	124	62	62	48
16	庄崎第三	32	15	17	17
対象地区計		1,578	826	752	692
17	高瀬第一・二	207	102	105	71
18	高瀬第三	130	57	73	58
19	九十九団地	25	8	17	11
20	上市之瀬	22	12	10	12
21	下市之瀬	112	58	54	45
22	明野	28	15	13	11
23	越坂	173	84	89	69
合計		2,275	1,162	1,113	969

平成27年国勢調査速報集計「市町地区別人口及び世帯数」より

¹ 昭和 59 (1984) 年頃、この「字小木」は小木地区人口の 83%を占めていた(『内浦町史 第三卷 通史・集落編』1984 : 889)。

² 『内浦町史 第二卷 近世・近現代・民俗』(1982 : 833)

³ 『内浦町史 第三卷 通史・集落編』(1984 : 889)。小木地区には農協 (JA) がいない。『農林業センサス農業集落カード』に記載されているのは、小木地区では明野と越坂のみである。

⁴ 『内浦町史 第三卷 通史・集落編』(1984 : 934)

若くして大金を稼いだ次男坊・三男坊などがここに「シntax」(分家)を建てたという⁵。

このような字小木と他集落の性格の違いは、かつてほどでないにせよ今でも残っているように見える。字小木には商店街があり、石川県漁業協同組合小木支所、小木支所、珠洲警察署小木駐在所、小木公民館、小木地区活性化センター、小木小学校、小木郵便局、興能信用金庫小木支店、スーパーしんや小木店、小木クリニック、草山歯科のほか、七尾海上保安部能登海上保安署や金沢大学環日本海域環境研究センター臨界実験施設などの施設もある。一方、北國銀行小木支店や石川県立能都北辰高等学校小木分校は、それぞれ2008年と2009年になくなった。

2.2 行政単位の変化

対象地区である字小木は、江戸時代には珠洲郡の一部で、加賀藩領だった⁶。

明治22(1889)年の町村制の実施により、小木、越坂、市ノ瀬の3か村が合併して「小木村」を形成した⁷。

明治40(1907)年には、小木村と高倉村(町村制施行により、真脇、小浦、羽根、大沢の4か村が合併して出来た村)が合併して「小木村」となり、役場は小木に置かれた⁸。

大正10(1921)年の町制実施により、小木村は「小木町」と改称した⁹。

昭和30(1955)年3月、小木町は宇出津町などと合併して鳳至郡能都町を作ったが¹⁰、同年10月には松波町が能都町字小木、越坂、市之瀬、明野、羽生(はにゅう)の一部(羽生ろ)を編入したことにより、小木地区は松波町の一部となった¹¹。

次いで昭和33(1958)年12月1日には、改称により松波町は内浦町となり、小木地区は内浦町の大字となった¹²。

平成17(2005)年3月1日には、鳳至郡の能都町、柳田村、珠洲郡の内浦町が合併して能登町が誕生した¹³。内浦町の中にあった小木地区はこの合併によって、鳳至郡能登町小木地区となった。

2.3 外部との交通

小木地区は、能登半島内浦に位置し、南から「本小木港」「小木港」「九十九湾」の3

⁵ Uさん(三矢第二、男性、71歳)、Iさん(西町第二、男性、68歳)、Nさん(庄崎第二、女性、67歳)、Hさん(下浜第一、男性、44歳)

⁶ 『角川日本地名大辞典 17 石川県』(1981: 200)

⁷ 『石川県珠洲郡誌』(1985 [1923]: 331)

⁸ 『石川県珠洲郡誌』(1985 [1923]: 331-332)

⁹ 『石川県珠洲郡誌』(1985 [1923]: 332)

¹⁰ 『内浦町史 第三巻通史・集落編』(1984: 890)

¹¹ ウィキペディア「内浦町」、『角川日本地名大辞典 17 石川県』(1981: 201)

¹² ウィキペディア「内浦町」、『角川日本地名大辞典 17 石川県』(1981: 201)

¹³ ウィキペディア「能登町」

つの港を有する。リアス式海岸で、波が低く水深が深いため、良港として栄えた¹⁴。屈曲する海岸線が続く一方で、丘陵が海岸にせまるところが多く、平地は少ない。

小木港は港内広からずと雖も、水深く風波穏やかにして、船舶の碇泊に便なるが故に、往時は越中北海道を往復する和船の出入甚だ頻繁なりしが、近年稍稍其数を減じたり¹⁵

小木地区は海蝕崖が多いため、かつての交通は船によるものが多かった。Wさん（下浜第一、男性、78歳）は、「昔は海の交通が主だった。小木―宇出津―鶴川―七尾が定期航路だった。金沢へは、七尾から汽車で行った」と話して下さった。

他地域と同様に小木でも、海上交通から陸上交通への転換を経験する。上出のWさんも、かつて「金沢へは七尾から汽車で行った」とおっしゃった。昭和34（1959）年に開業した国鉄能登線は、昭和38（1963）年には松波まで路線を延ばしたが、昭和37（1962）年には下市之瀬に国鉄小木駅が設置された¹⁶。昭和39（1964）年に能登線は蛸島まで達したものの、その後不振のために徐々に営業縮小され、平成17（2005）年には、能登線穴水・蛸島間が全線廃止となった¹⁷。現在（2019年8月）、旧小木駅舎は、市之瀬地区の集会場として再利用されている。

また、小木トンネル（1926年）、市之瀬トンネル（1928年）、真脇トンネル（1932年）の開通とともに自動車交通が発達した。「のと里山海道」はもともと昭和57（1982）年に、「能登有料道路」として開通したが、平成25（2013）年に無料化され、その際に現在の名前に改称した。現在、金沢市から自動車で小木地区に行くには、のと里山海道を通って、約138キロ、2時間10分ほどの距離である。

バスによる外部との交通としては現在、北陸鉄道株式会社による特急・高速バスが、小木港と金沢との間を、上下線ともに一日2便が運行されている。直行バスで約3時間、大人片道2600円かかる¹⁸。

このほか、輪島市、穴水町、能登町にまたがる木原岳周辺に、2003年7月7日に能登空港（のと里山空港）が開港し、東京（羽田）空港との間で1日2往復の便が飛んでいる¹⁹。能登空港の利用には、地元住民と観光客に対して各種の助成制度がある。

さらに、2015年3月15日には、北陸新幹線により金沢と東京とが最短2時間8分で結ばれることになった。

このような飛行機と新幹線による交通の発達には、壮年若年世代が関東地域に出ている

¹⁴ 一方、リアス式海岸は定置網には向かない（越坂、女性、60歳代）。

¹⁵ 『石川県珠洲郡誌』（1985〔1923〕：330）

¹⁶ 『内浦町史 第三巻 通史・集落編』（1984：911）

¹⁷ ウィキペディア「のと鉄道能登線」

¹⁸ ウェブサイト「北陸鉄道株式会社」「特急・高速バス」

¹⁹ 能登空港は、石川県および地元自治体と全日空との間で結ばれた搭乗率保証制度をもとに営業している。一定の搭乗率がなければ、石川県および地元自治体が全日空に対して損失補填をおこなうという契約である（ウィキペディア「能登空港」）。

小木住民にとって大きな意味をもっている²⁰。

2.4 地区内の交通

地区内での交通の便は、買い物、通学、通勤、医療機関までの移動などで重要になる。いずれもかつては徒歩での移動が中心だった。

明治期には字小木の住民は、市之瀬、越坂などの近隣集落へ行くために、高瀬山を越えなければならなかった。山越えに比べると小舟での往来ははるかに容易だったので、越坂に住む子供は、小学校に通学する際に九十九湾の渡舟に乗って行った。渡船は明治23（1890）年に始まり、昭和40（1965）年頃まで存続していた²¹。

I さん（下浜第二、男性、87 歳）「昭和42～43 年頃まで渡し船があった。乗客の数を見ながら、いっぱいになると船頭さんが「出るぞ～」と言い、出発していた。」

N さん（越坂、男性、72 歳）「昔、越坂の子供は渡し船で渡って、学校に通っていた。」

現在の小学生は原則的に徒歩で通学するが、遠方の生徒たちは路線バス（のと鉄道転換バス²²）で小木港まで来て、そこから小学校まで徒歩で行く。高台の高瀬にある小木中学校までの通学については、旧小木の生徒は自転車使用禁止のため徒歩で行くが、その他の地区の生徒は自転車が可能である²³。

昔は、買い物は地元でしたという²⁴。現在は、地区内にスーパーがあり、自動車を利用できなくなったお年寄りや、足りないものを急いで買いにきた人が多い。町外（小木地区外）で働いている人は（自動車を利用しているので、職場近くのスーパーで買い物をする人も多い。しかし、買い物は自動車です日に行くことが多く、「車が運転できなくなったら、きつい」と住民の方は指摘された²⁵。小木地区の住民が、目的の品に応じて遠近のいろいろな店を利用し分けているが、総じて自動車が主な交通手段であり、高

²⁰ 例えば、S さん（庄崎第二、男性、66 歳）は次のように語られた。「息子は、埼玉の人と結婚して、埼玉の川越に住んでいる。子供もふたりいる。……時々、年に2 回ぐらい、埼玉に行く。孫を見たいから。昨日（2019 年8 月18 日）まで孫たちが（お盆のために）小木に帰ってきていた。昨日、能登空港に送っていった。今は、空港の他に、新幹線もある。」

²¹ 『内浦町史 第三巻 通史・集落編』（1984：508、523-524、889、899）。

²² のと鉄道廃止のため、代替の交通手段として運行しているバス路線。穴水―宇出津―珠洲間を走っている。ウェブサイト「能登町の公共交通 のと鉄道転換バス」を参照。

²³ U さん（三矢第二、男性、71 歳）、I さん（西町第二、男性、68 歳）、N さん（庄崎第二、女性、67 歳）、H さん（下浜第一、男性、44 歳）

²⁴ N さん（下浜第一、男性、87 歳）

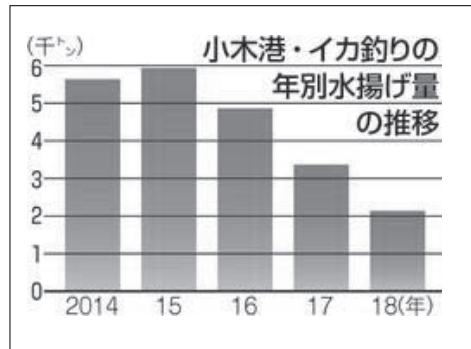
²⁵ U さん（三矢第二、男性、71 歳）、I さん（西町第二、男性、68 歳）、N さん（庄崎第二、女性、67 歳）、H さん（下浜第一、男性、44 歳）。このほか次のような声も聞かれた。「日用品の買い物には地元のスーパーや宇出津、松波の店にしているが、ないものについては、七尾や金沢まで買いにゆく」（K さん、下浜第二、男性、61 歳）。「最低限の日用品は地元のスーパーで買うが、嗜好品は「河北イオン」や金沢まで出て買っている。急ぎでなければ、Amazon（ネット販売）も利用して買っている。エアコンの取り付けや電化製品の修理とかは地元の電気屋さんでしている（S さん、庄崎第二、男性、50 歳）。

齢化のために自動車が利用できなくなることが懸念されていることが分かる。

2.5 生業

江戸時代に小木地区は、漁業の他に、あいのもの、廻船業を営むものが多かったほか、小木石として有名な石切業があった²⁶。漁業もタラ漁、イカ漁、サバ漁が中心で、特産の小木タラの切漬は藩主への献上物であった²⁷。

近代においては水産業が盛んで、大正 5 (1916) 年には、小木から北海道へ出漁してのイカ釣漁が始まり、機械船の発達と共に



飛躍的な発展を遂げた²⁸。第二次世界大戦後はサケマス漁業協定が創設され、漁船も昭和 44 (1969) 年頃からは鋼鉄船となり、遠く北洋・オーストラリア方面での漁場の開拓が目指された。昭和 55 (1970) 年にはオーストラリア西南部沖に 99 トンのイカ釣り専用船 11 隻が出漁したが、現地までの往復日数や大きな経費のために 2 年で取りやめになった²⁹。

かつて好調だった漁業も、イカ資源の減少と二百海里の設定による漁場の減少により、昭和 52 (1977) 年には水揚げ量を大きく減らし、以来減少傾向にある。最近では、資源量減少に加えて、北朝鮮船や中国船の違法操業によって「慣れ親しんだ大和堆」での操業が難しくなっている³⁰。

2.6 教育

昭和 23 (1948) 年生れの U さんによれば、学齢期前の児童が行く保育園のようなものが伝証寺境内にあり、そこに行った。第一期生くらいだったという。大した保育制度ではなく、お寺の御堂に集まって遊ぶくらいだった。これと別に町立保育園があったが、少子化のためになくなった³¹。現在は、下浜の小木小学校のとなりに松波の社会福祉法

²⁶ 『角川日本地名大辞典 17 石川県』(1981:200)、『内浦町史 第三巻 通史・集落編』(1984:889)。

²⁷ 『イカのほん』(2019:31)、『角川日本地名大辞典 17 石川県』(1981:200)。一方、市之瀬、越坂は半農半漁によって発達した集落で、明野は戦後の開拓集落である(『内浦町史 第三巻 通史・集落編』1984:889)。

²⁸ 新潟県の佐渡の人たちも北海道へイカを求めて出漁したため、小木と佐渡との交流が広がった。当時先進的だった佐渡のイカ釣具や漁法が日本海側に広がったほか(『イカの本』2019:33)、御船神社(西町)が佐渡の小木から船玉神猿田比古命と本地十一面観音との分魂を受けて始まったという伝承もある(小倉 1982:652-653)。

²⁹ 『イカのほん』(2018:38-39)

³⁰ 『北陸中日新聞』2019年11月7日号

³¹ U さん(三矢第二、男性、71歳)。

人内浦福祉会が経営する「小木こども園」がある。同園は、平成 29 (2017) 年に認可を受け、幼稚園から幼保連携型認定こども園「小木こども園」となった³²。

現在、下浜に小木小学校がある。小木小学校はもともと明治 6 (1873) 年に、伝証寺の土地に創立され、伝証寺、円超寺、個人の土地で授業をおこなっていたが、昭和 9 (1934) 年に下浜に新築移転した。昭和 36 (1961) 年には火事により校舎の一部が消失し、翌昭和 37 (1962) 年に新校舎を落成したが、昭和 56 (1981) 年にはかげなし団地に移り、鉄筋コンクリート三階建ての新校舎を落成した³³。

他所と同様に小木小学校でも、少子化にともなう児童数減少が顕著で、住民からも「今では一学年 10 人前後しか生徒がいない」という言葉が聞かれた³⁴。小木小学校は、能登町教育委員会から「海洋教育拠点校」の指定を受け、里海教育に注力している³⁵。

小木中学校は、終戦後の昭和 22 (1947) 年に新設された。昭和 27 (1952) 年には下浜の別の場所に校舎を新築した。昭和 53 (1978) 年には、新興住宅地として開発された高台の高瀬台団地の中に移転した。小学校と同様に、現在では生徒数の減少が顕著である。

小木中学校は、防災教育と海洋教育に力を入れている。小木小学校と同様に海洋教育は、九十九湾岸に建てられた金沢大学環日本海域環境研究センター臨海実験施設との協力のもとでおこなわれている。防災活動では、中学生が「ペットボトル」(ペットボトルで作った誘導灯で、夜に避難経路を示す誘導灯) のチェックや修理をおこなっている³⁶。

この他、石川県立水産高等学校小木分校が、無線通信士・技術士を養成する専門学校として、昭和 42 (1967) 年に開校したが、平成 21 (2009) 年に閉校となった³⁷。平成 12 (2000) 年から閉校までは、石川県立能都北辰高等学校小木分校の名称だった。

表2 小木小学校の生徒数

学年	男子	女子	合計
1年	4	5	9
2年	5	5	10
3年	4	6	10
4年	9	3	12
5年	5	6	11
6年	7	8	15
たんぼぼ	1	0	1
さわやか	1	0	1
合計	36	33	69

(小木小学校HPより。2019年4月付)

表3 小木中学校の生徒数

学年	男子	女子	合計
1年	2	0	2
2年	4	7	11
3年	5	7	12
合計	11	14	25

(小木中学校HPより。2019年4月付)

³² 小木こども園「平成 30 年度 事業報告」

³³ 『内浦町史 第三巻 通史・集落編』(1984 : 546、557、585-586、899-902)

³⁴ U さん (三矢第二、男性、71 歳)、U さん (西町第二、男性、68 歳)、N さん (三矢第二、女性、67 歳)、H さん (下浜第一、男性、44 歳)。『内浦町史 第三巻 通史・集落編』(1984 : 591) によると、小木小学校の昭和 37 (1962)、38 (1963) 年度の新友学児童はそれぞれ 73、69 人である。

³⁵ 小木小学校「学校概要」(小木小学校 HP 掲載)

³⁶ 小木中学校教頭 S さん (小木地区外、男性、50 歳代)

³⁷ ウィキペディア「石川県立能都北辰高等学校小木分校」、石川県立能都北辰高等学校小木分校・情報通信科・専攻科無線通信科ウェブサイト。

かつて漁業が盛んだったときには、中学卒業生の大部分が漁師になったという³⁸。進学者の多くはかつて、航空石川高校、能登高校、飯田高校に進学したが、現在は学区制が廃止されたため、七尾高校などにも進学している³⁹。住民によれば、漁業が盛んでなくなった現在では、若い世代の多くが小木を出て行くようになってしまった⁴⁰。

小木中学校教頭 S 先生は、「30 年前には中学校はもっと荒れていた。身近に漁師をして大金を稼いでいる人を見て、勉強しなくても儲かっていると反発する生徒も多かったのだ」と語って下さった。後の 9 章で見るとおり、一時期に子供たちが荒れていたことから、子供たちの健全な育成のために青壮年連合会が結成され、祭り参加のあり方を変えたり、地域活性化に努力したりするようになった。

2.7 神社

『内浦町史 第一巻 自然・考古・社寺』所収の「小木地区の神社と祭礼」(小倉 1981)によると、小木地区には、御船神社(小木)、恵比寿神社(小木)、熊野神社(市之瀬)、日吉神社(越坂)、鶴落神社(越坂)の 5 つの神社がある。このうち今回の実習対象地である字小木内に位置する御船神社と恵比寿神社について紹介する。

2.7.1 御船神社

御船神社は、西町の丘陵(磯越山)上に鎮座し、主祭神は「猿田比古神・表筒男命・中筒男命・底筒男命(さるたひこのかみ、うわつつのおのみこと、なかつつのおのみこと、そこつつのおのみこと)」で、相殿の神を金刀比羅神(ことひらのかみ)としている。いずれも海上安全の加護を願って祀られている。

御船神社の由来は佐渡の小木に結び付けられ、漁業中に危難にあった次右衛門という者が神助に感謝して、佐渡の小木から能登の小木に祭神を勧請したとも言われる。御船神社は長年海で生業を営む人々から広い信仰をうけ、またその信仰には観世音菩薩の慈悲による無病息災信仰も関わっていた。本殿などの神社の建物の多くは、小木漁業協同組合、小木いか釣船団、石川県鮭鱒漁業協同組合、根室漁業協同組合、小木漁協所属の船主などが寄進したものである。小木町一円(1979 年時点で 856 世帯)を氏子とし、町内会からはそれぞれ氏子総代 2、3 名が選出され、氏子総代の中から氏子会長がえらば

³⁸ N さん(下浜第一、男性、87 歳)は、中学卒業生 45 人中 10 人程度が高校進学し、残りは漁師として働き始めたとおっしゃった。W さん(下浜第一、男性、78 歳)は、「中学を卒業すると進学が 2 割で、8 割近くが漁師になった。進学の場合は、宇出津(能登高校)か飯田(飯田高校)に行っていた」と語られた。

³⁹ U さん(三矢第二、男性、71 歳)、I さん(西町第二、男性、68 歳)、N さん(庄崎第二、女性、67 歳)、H さん(下浜第一、男性、44 歳)

⁴⁰ U さん(三矢第二、男性、71 歳)、I さん(西町第二、男性、68 歳)、N さん(庄崎第二、女性、67 歳)、H さん(下浜第一、男性、44 歳)。その結果、小木にある墓の管理がおこなわれず荒れてしまうという事態も発生したため、平成 15(2003)年には墓地管理組合が作られ、小木在不在にかかわらず一世帯年間 700 円を集めて、墓の周りのごみ処理や草刈りをおこなっている。

れる。「氏子総代は毎月負担金を醸出する」⁴¹。

2.7.2 恵比寿神社

恵比寿神社は、金剛山に海に向かって東面して鎮座し、事代主神（ことしろぬしのかみ）を祭神とする。通常は「恵比須神社」と称し、俗に「エビスさん」と呼ばれている。

神社の創祀は明治 39（1906）年で、漁業不振を憂いた小木漁業組合漁師総代 2 名の発願により、西宮夷社（西宮市）から恵比須神を勧請したのが始まりである。その後も社殿の改築や神社の管理には、小木漁業協同組合などの漁業関係者が当たっており、「出漁にあたっては本社の鎮座する金剛山の沖で神酒をささげ、海上安全と豊漁を祈って漁場に向かう慣行があるくらいである」⁴²。

2.8 祭り

小木地区の主要な祭りは、御船神社の春祭り（とも旗祭り）と恵比寿神社の秋祭り（袖きりこ祭り）である。このほかに、かつては恵比寿神社の祭りが、7月10日（恵比寿祭り）と11日（観音祭り）にあったが、今ではおこなわれていない。

2.8.1 とも旗祭り⁴³

能登町役場ウェブサイトでは、とも旗まつりは次のように紹介されている⁴⁴。

石川県指定無形民俗文化財 小木「とも旗祭り」

小木の氏神御船神社の春祭りで、小木港を大のぼりと5色の吹き流し、大漁旗を揚げた船が笛や太鼓を打ち鳴らし、湾内せましとかけめぐる。

明治中期、子供等が大漁と安全を祈願し、紙で継いだ小さな旗に船名を書きそれを伝馬船に立てて遊んでいた。後に神輿の港内渡御に運航する事が慣例となり、現在のとも旗祭りとなった。祭り当日は、北東から風が吹き、祭りが終わる頃には南西の風に変わり豊漁になると伝えられている。

開催場所：小木地区 御船神社、小木港～九十九湾

開催日時：毎年5月2日（6：00～、14：30～）

5月3日（7：00～、13：00～）

ここにあるとおり、とも旗祭りは石川県の重要無形民俗文化財である（平成18[2006]年指定）。石川県による指定に先立ち、旧内浦町が昭和49（1974）年に、能登町が平成17（2005）年に、重要民俗文化財指定をおこなっている。

⁴¹ 小倉（1981：656）

⁴² 小倉（1981：663）

⁴³ この祭りは「とも旗祭り」「伴旗祭り」などと様々に表記されるほか、口頭では「とんばた祭り」などとも呼ばれる。本報告書では「とも旗祭り」と統一して表記する。

⁴⁴ 石川県のウェブサイトには、小木とも旗祭りの重要無形民俗文化財指定に関するの記事がある。

とも旗祭りは変化してきている。元々とも旗祭りは、小規模な、青年たちの荒々しい祭りとして始まったが、後に競争によって大型化するとともに、子供たちが時間をかけてとも旗を制作、乗船し、「出漁する父さんの安全を祈る祭り」となった⁴⁵。かつてとも旗を載せていたのは漁船だったが、漁船が足りない町内もあったために、昭和 45、46（1970、71）年頃から伝馬船を用いるようになった⁴⁶。さらに祭りの開催日も、かつては4月17、18日だったが⁴⁷、今では5月2、3日におこなわれている。現在は9本のとも旗が出る。

とも旗祭りが子供を主役とした祭りとなって久しいが、子供の参加のあり方は変化してきている。60、70歳代の住民によれば、かつては中学3年生の子供を中心として、子供たち自身が1ヶ月ほどの時間をかけてとも旗を作ったという。漁師の倉庫を借りたり、リーダーの子供の家で作業したりしたが、中学3年生が1、2年生に教えていた。「中学生のみの活動だったため悪さが生じることもあった」⁴⁸。

現在では、壮青年連合会がとも旗づくりを中心的に担い、子供たちは大人の指導の下でとも旗を一本だけ制作する。この背景には、少子化により子供を中心としたとも旗づくりが難しくなったことがある。そして「地域の伝統文化の継承といった観点などから、平成12（2000）年から地元「小木中学校」の「ふるさと学習」の授業に盛り込まれ、学校と地域が連携し、2年生（祭礼時は3年生）全員で1本の「とも旗」を作るようになった⁴⁹。しかし、旗に字を書くときには参加生徒の名前を入れ、とも旗起しの時には子供たちも一緒に起し、とも旗船にも乗る⁵⁰。

2.8.2 夏祭り

かつて毎年7月10日に、小木漁業協同組合が中心になっておこなわれた「小木の夏祭り」があった⁵¹。大きなヤマギリコをぶつけ合う荒々しい祭りで、状況を知らない「旅の漁師」（他所から来た漁師）が挟まれて亡くなってしまったこともあった⁵²。祭り消滅

⁴⁵ Nさん（庄崎第二、男性、72歳）

⁴⁶ Iさん（下浜第二、男性、87歳）

⁴⁷ 小倉（1982：677）

⁴⁸ Kさん（下浜第二、男性、61歳）、Oさん（三矢第一、男性、71歳）、Wさん（下浜第一、男性、78歳）。青少年育成におけるとも旗づくりの意義については、小倉（1982：691）も、往時をしのぶ地元の人の言葉として、次のように記している。「（少年たちは）もとは「高等小学校を卒業すれば直ぐ漁師になった。この春祭りを期として漁師になる。船底一枚下は地獄といわれた漁師の世界に入るの、トンパタ祭りが人生の境目になる気がしたものである。パンヤ（作業場のこと）に先輩がやってきて大人社会の生活習慣を教えた。春祭りが済めば北海道へ鮭鱒やイカ釣りに出漁するので、いわば人生の転換期にあたり、大人になった気持ちで、いわゆる非行とされる行為にいどんだものだった」。本書9章で見ると、昭和60（1985）年頃に結成された青壮年連合会は現在、地元の青少年の健全な育成にも重要な役割を担っているが、かつてのとも旗づくりにおいて若者組がもっていた役割を継続しているといえる。

⁴⁹ スマイル・プロジェクトHP「とも旗祭り～制作始まる」

⁵⁰ Nさん（庄崎第二、男性、72歳）

⁵¹ 小倉（1981：663）

⁵² Nさん（下浜第一、男性、87歳）

の理由は、漁業不振のためにヤマが出されなくなったためだという⁵³。

2.8.3 盆踊り

神社祭礼ではないが、8月には小木公民館主催で盆踊りが開催される。婦人会が先頭になって踊り、4、500人の参加があるという⁵⁴。

2.8.4 袖きりこ祭り

能登町役場ウェブサイトでは、小木袖きりこ祭りは次のように紹介されている。

能登半島では珍しい奴凧を思わせる形の大あんどん。クライマックスでは、9基の袖キリコが御船神社に向かう急で細い坂道を押上げられる。その強さと迫力は漁師町ならではの勇ましく迫力ある祭り。

明治11・12年、社頭造営に曳き出した。当時のキリコは巨大で西町、東町などは幅は十一間、高さ四間半であったが、大正3年、電灯線が架設されたので現在のように小さくなった。奉燈キリコは能登一円に多くあるが、小木袖キリコは、ねぶたの流れをくむものではないかと思われる。両面の武者絵の描き方も良く似ており、日本海文化の影響を受けていると考えられる。

開催日：毎年9月第3土日

開催場所：能登町小木地区全域

<見所>

初日の23時頃に、御船神社に向かう急で細い坂道を、袖キリコが押し上げられる姿は圧巻。

<スケジュール> ※あくまで目安です

1日目：庄崎海岸→下浜信号→中通り→西町海岸（休憩）→社坂（宮上げ）

20：30 庄崎海岸集合、20：40 出発、20：50 西町海岸（休憩）、

22：00 花火打ち上げ、22：30 宮上げ

2日目：庄崎海岸→海岸通り→奥成薬局裏→新町坂前

16：00 庄崎海岸に集合（御輿の到着を待つ）

準備でき次第 高瀬を先頭に出発

（干場薬局前で辻回し後、小休止）

18：00 御輿の宮入（キリコは各町内へ帰る）

袖きりこ祭りは御船神社の秋祭りである。祭りの中心は神輿の渡御であるが、神輿の他に、女性の着物の袖の形をした「袖きりこ」が行燈の役割をになう。現在袖きりこは、祭りの班から一台ずつ計9台出される。神輿と袖きりこの、町内での辻回しと宮上げが

⁵³ 小倉（1981：663）

⁵⁴ Uさん（三矢第二、男性、71歳）、Nさん（庄崎第二、女性、67歳）、Hさん（三矢第二、女性、72歳）。『小木よもやま話2』（2015：24）によれば、戦後しばらくの間は、法融寺の前で盆踊りをしていた。

雄壮で、小木地区の範囲をこえて、能登町の代表的な祭りのひとつとなっている。

袖きりこ祭りもいくつかの変化を経てきた。上記のウェブ記事にもあるように、明治期の袖きりこは巨大だったが、電灯線が仮設されてから小さくなったとされる。初期のきりこは担ぐ形式のものであったが、後に車輪をつけるようになった⁵⁵。

かつて開催日時は9月17、18日に固定されていたが⁵⁶、現在では9月第3土曜日におこなわれるようになっている。上記ウェブ記事に「見所」という項があるように、祭りは観光化されており、日時変更も観光客へ配慮したためだと考えられる。また、他所に出ている小木出身者が帰省して祭りに参加しやすいようにという配慮もあるのだろう。

祭りの実際的な運営も、以前は区会（各町内）が中心であったが、現在は壮青年連合会が中心となっている。また平成12（2000）年には小木地区に祭礼委員会が組織され、小木地区の祭りの組織的な運営をおこなっている。

最近の変化は、少子化と若者が他所に出て行くことによる人手不足であろう。現在9本出される袖きりこは、「数年前までは10本あった」⁵⁷。きりこの担ぎ手が祭り単位の町内ではまかなえず、大学生などにも依頼しているという⁵⁸。祭りに参加しない者には「違約金」が課せられ、それが1万5千円する町内もある⁵⁹。

2.9 寺院

小木地区には字小木に、いずれも真宗大谷派の法融寺、円超寺、伝証寺の3寺がある。

法融寺は、永禄2（1559）年に蓮如の書せる名号を本尊として、小木海田に建立された「梅田道場」が後に法融寺となった⁶⁰。

円超寺の起源は、開基円明が明暦元（1655）年3月に法融寺第六代栄正の弟子となって小坊を建てたが、天和2（1682）年2月1日に本山より円超寺の寺号をうけたとされる⁶¹。

伝証寺については、延宝3（1675）年頃は珠洲郡新保村にあって真言宗伝証寺と称したが、後に改宗して法融寺の末寺となった⁶²。

円超寺と伝証寺は無檀寺であるため⁶³、法融寺が小木地区の中心的な寺となっている。伝証寺は保育園（小木こども園）として使われている一方、円超寺はなくなって、法融

⁵⁵ 小倉（1981: 657）の時点ですでに、きりこに車輪をつけた形式になっている。

⁵⁶ 小倉（1981: 657）の時点では、祭りの期日はまだ九月17、18日である。

⁵⁷ Kさん（下浜第二、男性、61歳）

⁵⁸ Tさん（高浜第二、男性、80歳）

⁵⁹ Iさん（西町第二、男性、68歳）、Iさん（新町、男性、66歳）、Mさん（下浜第一、男性、70歳）

⁶⁰ 『石川県珠洲郡誌』（1985 [1923] : 344）

⁶¹ 『石川県珠洲郡誌』（1985 [1923] : 345）。『小木町誌』（初版1943；写本版 n.d. : 21）によれば、本山から次号を受ける以前、円超寺もまた円融寺の末寺だった。

⁶² 『石川県珠洲郡誌』（1985 [1923] : 345）

⁶³ 『小木町誌』（初版1943；写本版 n.d. : 21）

寺の駐車場となっている⁶⁴。

法融寺は、「千戸の門徒」をもつと言われる大寺で、漁業が盛んな時代には漁師たちから多くのお布施があつまった。10年程前に法融寺の屋根瓦を葺き替えるために寄付を募ったときには、合計1億2千万円もの寄付が集まったという⁶⁵。法融寺は非常に多忙で、土日に法事をおこないたい場合には、数年前からの予約が必要な場合もあるという⁶⁶。

小木地区も以前は葬式を寺でおこなっていたが、17年程前に斎場が出来てからは、斎場で葬儀をおこなう人がほとんどになった⁶⁷。葬儀では、教区の大谷婦人会の人々が経を唱えてくれる⁶⁸。

葬儀に関連して、小木地区には「御座」（ござ）という独特の風習があつたという。死後6日目の晩に御座を開き、僧を招き門徒衆が集まり、読経の後に御談合を催した。その際に子供たちは、どこどこで御座が開かれるということを町内を回って触れ回った。終わるとお礼がもらえたので子供たちの楽しみのひとつだった⁶⁹。

2.10 地区の特徴

小木地区は、東を海に接し、陸側は3つのトンネルによって能登半島の内陸部とつながっている。金沢から自動車で行く道は、能登空港ICまでのと里山海道を走った後、珠洲道路に入り、柳田地区あたりで東に折れて、宇出津を目指す。宇出津の市街を抜けて、真脇を通った後で、真脇トンネルと抜けると、小木地区である。この地勢は、小木地区を独立的で、能登の他の地区と違った性格にしていると述べる住民の方がいらした。また小木の人々は北海道などへ古くから（漁の）出稼ぎに出かけ、（漁師たちの）「奥さんも」北海道、東北、鹿児島などから嫁いできている人もいるために、外の違ったもの、新しいものへ開放的な性格をもった地域だとのことだった⁷⁰。

現在の小木地区のシンボルは「イカ」である。歴史を振り返ると、漁業のみが必ずしも生業のすべてでなく、漁業のなかでもタラ、サケ、マスもまた多く獲れていた時期があるし、加えて近年はイカ漁もかつてほどの漁獲を得られなくなっている。しかし、地域活性化プロジェクト「小木スマイル・プロジェクト」の主要活動が「イカす会」であ

⁶⁴ Uさん（三矢第二、男性、71）、Iさん（西町第二、男性、68歳）、Nさん（庄崎第二、女性、67歳）、Hさん（下浜第一、男性、44歳）

⁶⁵ Yさん（庄崎第一、女性、94歳）

⁶⁶ Mさん（下浜第四、女性、79歳）、Tさん（下浜第四、女性、77歳）、Hさん（下浜第四、女性、70歳）

⁶⁷ Mさん（下浜第四、女性、79歳）、Tさん（下浜第四、女性、77歳）、Hさん（下浜第四、女性、70歳）

⁶⁸ Nさん（庄崎第二、女性、67歳）

⁶⁹ 『石川県珠洲郡誌』（1985 [1923] : 364）。『小木よもやま話1』（2013 : 22）、『小木よもやま話3』（2019 : 9）。

⁷⁰ Uさん（三矢第二、男性、71）、Iさん（西町第二、男性、68歳）、Nさん（庄崎第二、女性、67歳）、Hさん（下浜第一、男性、44歳）

り、2020 年春オープン予定の観光交流センターの名称が「イカの駅」であるように⁷¹、「イカ」は小木地区の住民が自己表象する際の中心的なシンボルとなっている。

3. おわりに

以上、小木地区および、本実習調査の対象地域である「字小木」について概観してきた。

先述したとおり、本報告書は全体としてひとつの総合的な地域調査次週報告書を目指しているが、第 2 章以下の各章は各学生の関心に沿ったテーマについて書かれているため、この第 1 章では抜けおちる重要な事柄を少しでもカバーしようとしてきた。しかし、7 日間という短い本調査とその後の散発的な補充調査で得られた情報は限られたものであり、お話をうかがう機会のなかった方も多かったうえ、私どもの力不足により、せつかくうかがった貴重なお話の多くを報告書の中に記すことができなかった。何よりも学生の実習ということで調べる側の未熟さは言うまでもなく、本報告書の記述にも分析にも不正確、不十分な点が多くあるものと自覚している。ここにお詫びするとともに、関係各位の忌憚ないご批判、ご叱正をお願いする次第である。

本報告書で示される聞きとり対象者の年齢は、その方の 2019 年 12 月末日時点の満年齢である。

⁷¹ 能登九十九湾振興協議会ウェブサイト「まだ見ぬオギ九十九湾 991」